

第15部会

政直と名乗った。会津ではこうした里修験をホウイン（法印）と呼び、修験道廃止後も祈禱や教育などに携わっていた。

吉祥院伝来の『簠簋傳』は全三巻からなる。各巻に本文の字句に関する若干の書き込みの他に、別筆で関連類似する記事が付け加えられている。成立については、巻二（中巻）巻末の書き込みによると中世（元龜三年以前）に遡る。三巻という巻数も古態を残したものと見える（中村璋八『日本陰陽道書の研究（増補版）』一九八五、参照）。さらに修験の家に伝来したことから、東北大学本（永禄二年・一五五九写、船曳宝船寺旧蔵）とともに東北地方における陰陽道の知識の伝播についての貴重な典籍ということができよう。

こうした『簠簋傳』の特徴について、さらに詳しく書き込みに注目して考察しておきたい。巻一（上巻）の巻末には、正月一日の十干でその年の天候や豊凶を判断するための知識が記載されている。類似の知識は岩手県二戸市似鳥の三上家本『東方朔秘傳』（近代の写本）の中にさらに「東方朔置文ノ事」として記述がある（拙稿「三上家本『東方朔秘傳』——解題と翻刻」『愛知県立大学文学部論集』五一、二〇〇三、参照）。また、

巻二（中巻）の巻首には「住吉裁衣」という書き込みがある。前掲中村著書によれば、東北大学本（第二）には「住吉大明神物裁日取」という記事があるという。『月庵醉醒記』（天正期成立）中巻に「住吉衣たちの吉日」があり、寛永九年（一六三二）板の『大ざつしよ』巻上六九にも「物たちに吉日をえらふ事但すみよしざつしよと名付也」という記事がある（橋本・小池編『寛永九年版大ざつしよ』一九九六）。これらからすると、

こうした生活の中の日の吉凶の知識が、陰陽道の知識として修験を媒介に広がっていったことが推測できる。

以上の検討から、近世会津の里修験が、中世から連続して陰陽道書を利用し、生活知識、特に日の吉凶や豊凶の予測に関する知識を保持していたことが判明した。ホウインの宗教的活動はこうした系譜による知識に裏打ちされていたのである。こうした東北における里修験の宗教的な知識の吸収、利用は只見吉祥院独自の活動であろうか。今後は『簠簋傳』以外の吉祥院蔵書・聖教類をも検討するとともに、会津全体の里修験とそれに関わる民俗を幅広く検討して、東北における修験道と陰陽道との関係をさらに解明していきたい。

卜占における宗教的職能者の関与について

——粥占を事例として——

亀崎 敦司

三重県津市河芸町北黒田地区では、例年二月十四日に「大般若經転読粥占い」という儀礼が行われている。現地で通称「大はんにゃ」と呼ばれるこの行事は、津市中心部の曹洞宗四天王寺から導師として僧を招いて大般若經転読を行ってもらった傍ら、簡粥形式の粥占を執行し、その年の米の出来を占うものである。

この行事では、大般若經転読が行われることに加え、会場に

釈迦涅槃図、十六善神図の掛け軸がかけられ、鈴等の仏具のほかに祈禱札が用意されるなど、全般を通して仏式にて行われていることに特徴がある。粥占は全国的には、「神事」として行われることが多く、この事例のように仏式にて行われる粥占は珍しいといえる。北黒田周辺でも筒粥形式の粥占は行われているが、大般若経を転読する等の類似性はない。では、一体どうして、このような行事が行われているのであろうか。

この「大はんにゃ」に関しては、かつて地区に存在していた宝幢院の僧たちが大般若経六百巻を書写した偉業を偲んで、北黒田の住民たちによつてはじめられたとする伝承がある。伝承に登場する宝幢院は、地区の弥尼布理（いねふり）神社の神宮寺であり、神仏分離時に廃寺となっている。地区に保存された文書からは、宝幢院が禅宗の寺院であり、現在、大はんにゃの際に大般若経転読を行う津市の四天王寺の末寺であることが伺い知れる。また、安政四年の年号が残る板札からは、末寺である宝幢院にて四天王寺の僧たちが来て大般若経転読を行っていることがわかり、少なくとも近世末ぐらいからは、現在の様式で儀礼が行われていることがわかる。

ここで「大はんにゃ」という儀礼を、禅宗の法会という点から見直してみると、儀礼を構成する大般若経転読は、年をはじめに行われる「大般若会」として、また釈迦涅槃図の掛け軸をかけることやそれにちなんで行われる遺教経の読経は「涅槃会」としての一面を持っている。これに稲の豊作を祈る予祝的儀礼としての粥占を合わせて、「大はんにゃ」という儀礼は、内面に複数の意味を持って執行されている複合的儀礼である。た

だ、それらの意味が含意されているといえども、儀礼に携わる僧侶たちと住民たちとの間で同じ視点が共有されているわけではない。特に近隣の津市一身田に本山を置く真宗高田派との歴史的な結びつきにより、地区の住民のほぼすべては高田派の門徒であり、曹洞宗の教典である遺教経は普段接することがなく、なじみがない。宗教者側からは、大般若教会、涅槃会としての意味づけを持って執行されているといえども、民衆側は単に「大はんにゃ」としてのみ意識されるだけである。

「大はんにゃ」という儀礼は、このように内面に複数の意味が含意された儀礼でありつつ、宗教者と民衆のそれぞれの立場で異なる視点が交錯して執行される儀礼である。このため、粥占や大般若教会等の儀礼がいつごろからか習合して「大はんにゃ」が形成されてきたことも推測される。今後は、地区に残る板札からかつて津藩のために「武運長久」を祈って行われていたと考えられる大般若教会が、現在のように複合的な儀礼として地区の行事となつていった変遷の過程を、幕藩体制の崩壊や神仏分離等の歴史的動態を考慮に入れつつ、考察していきたいと考えている。

受動性のアニミズム

環境認識論の再考

長谷千代子

近年、環境問題への関心の高まりのなかでアニミズムを見直